（別紙２）

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）
県政の課題（テーマ）報告書

平成　29 年　6 月　5 日

山梨県知事 殿

本人氏名
鰺坂 司
留 学 先
セントノーバート大学
留学期間
平成 28 年 8 月 23 日～平成 29 年 5 月 15 日

研究の課題（テーマ）

グローバル社会の中で自立し率先して行動できる人材を育成するための方法について

提出内容

グローバル社会を理解していくにあたり、外国語を扱う「英語」は子どもたちの好奇心やモチベーションの向上と密接に関係している科目であり、教員の役割はとても大きい。私が教員になった際に取り入れたい点は、周囲の意見を大切にすることである。第一に実践したいと考えることは授業内での質問や発表の機会である。多くの日本人が躊躇うこととして、授業内で教師に質問を投げかけることがある。しかし、この行為におけるメリットは大きく、質問者本人だけでなく、それを聞くクラスメートも恩恵を受ける。縦の関係が強い日本であり、教師と生徒の良い関係性を築くことは難しいが、ジョークなどを授業に取り組むことにより、生徒が素直にいられるように授業を計画したい。授また、言語を扱う科目ということもあり、話し合いやディスカッションなどを取り入れることにより、生徒の思考力やコミュニケーション能力を向上させることができると私は考える。私自身の異文化経験だけでなく、英語教師になるにあたっての、言語に対する知識を増やすことで、様々な側面から生徒の外国語学習への意欲を高めることで、より多くの子どもたちに興味を抱いてもらい、グローバル社会に対応していける人材を育成したいと考えている。

添付書類

詳細について、図・表・写真などの資料も含めてＡ４縦版５枚以内にまとめて報告してください。

※パソコン・ワープロの使用可（使用する文字は１２ポイントとしてください。）

※図・表・写真等を用いて可

グローバル社会の中で自立し率先して行動できる人材を育成するために、教師の存在は大きいのではないかと私は考える。現在では小学校での早期英語教育の導入が推進されており、近いうちに英語が教科化し、子どもたちはより早い時期から「英語」という外国語に触れていくことになる。多くの国、特にヨーロッパの早い国々ではグローバル社会での活躍を見越して三歳ごろから外国語学習を開始する国も少なくない。早期英語教育に関しては様々な是非があるが、私は高校英語教師として、グローバル社会で生きていける日本人の育成の方法を今回の留学を通して多く考えさせられた。

第一に挙げられることは、生徒の意識づけである。私自身も直面した文化的な違いから起こる問題として、授業中の発言の差が大きく見受けられた。授業に出て、座っているだけのことが多かった日本の教育を受けてきた私にとって、授業中の発表やその態度が大きく見られるアメリカの教育では疑問があるたびに挙手をし、教授方が丁寧に答える、もしくは次の時間までに答えを用意していることが多くあった。話を遮っての挙手や質問であったため、初めの頃は抵抗も大きく、自分自身はただ傍観しているだけであった。しかし、その傍観の中で気づいた点として、傍観ですら様々な価値観や考え方に出会えたということである。というのも、私個人がただ授業を受けているだけでは、私の想像力や、話を聞いて考えられる疑問や質問には限りがある。この状況では教授対私の一対一の関係性であるが、クラスメートが発言をすることにより、その数だけ考え方や知識は深まっていくものであると気づいた。

アメリカの教育と違い、縦の関係が強く、周りを気にしてしまう国民性を持った日本の子どもたちでそのような教育を行なうということは難しいように初めは感じた。しかし、一年間異文化での教育を受けることにより、日本の教育でも実践できる点をいくつか見いだすことができた。一つは、雰囲気づくりである。アメリカの教授方は授業前や授業の後だけでなく、授業中やメール、オフィスアワーなどの学生と関わることができる時間を通して、多くのジョークや真剣な話を行なっていた。特に授業の際には多くの教授方はジョークを述べたり、自己開示を行ったりすることにより、より近い関係性を築いていた。日本人の特徴として、教師などは特に自分自身のことや家族のことについて言及することは少ないように思われる。しかし、自己を開示することにより、生徒に自分自身について知ってもらうことによりは親近感を覚えてもらう、より良い雰囲気や関係性を築いていけることを学んだ。

その他の点として、信頼感があった。生徒や学生から質問や疑問を受け付ける際に大事となってくることは、教師や教授の信頼感である。質問を受け付ける雰囲気が整っていたとしても、意見を発する学生のモチベーションを最後に引き上げているものは、教師や教授から適切な回答が返ってくることであり、それにより学びを深められることに達成したと言える。そのため、教師の知識量は重要なものである。英語教師になるにあたり、英語に関する知識はもちろん、私が今まで経験した異文化経験や言語学の知識を多様な面で活かすことで、多様な面から英語への学習の意欲を掻き立てたいと考えている。

これらの点を向上させることにより、生徒の能力も大きく変化すると私は考える。第一に挙げられることは生徒の英語力である。可能であれば英語での授業だけでなく多くの英語を話す機会を設け、質問なども英語のみに固定したいと考えている。私自身が受けてきた英語

教育では、リスニングやリーディングがほとんどであり、スピーキングの機会はほとんどないため、日本人の英語学習者で陥る傾向のある、話は聞けても言いたいことが言えないということが起こる。そのため、多くのインプットだけでなく、アウトプットも行うことができる授業を作ることで、より高い英語力を生徒に身につけていってもらいたいと考えている。

また、二つの言語を使うことによる脳への影響も大きい。言語が変わると性格が変わると言われる中で、私たちは頭の使い方も言語が変わることにより変化しているのではないかと考えている。極端に考え方が変わるというわけではないが、語彙やニュアンスの違いがあるため、より広い考え方ができ、それは子どもたちの思考力を向上させて行くものであると思っている。このメリットを活用するためにも、英語による質問を多く投げかけ、自分自身の力で考え、それを共有させて生きたいと考えている。

アメリカの教育を実際に受けて、ディスカッション活動への参加にも大きな違いが見られた。それはよく言われるように、アメリカや海外の学生は活発に意見を交換し合うという点である。確かに最初はその様子に圧倒されることが多かった。しかし、そこで私が感じたこととして、慣れの差が大きいということがある。英語を話すということと同様に、私たち日本人がディスカッションなどで意見をためらう理由として、周りを気にしたり、恥ずかしがったりする点がある。一年間実際に授業を受け、ディスカッションに臨むことで、私自身も苦手であった発言というものを克服できたということもあり、経験や慣れが重要なのではないかと気づいた。そのため、ディスカッションやグループ活動を授業内に取り組むことにより、発言を気軽にすることができる生徒を育成したいと考えている。聞き手に回ることが多い日本人だが、聞くだけでなく思ったことを発言できるということはグローバル化の中で生活して行く中で、必須のスキルとなってくるだろう。

また、英語教師の役割として、その経験を伝えることがある。私自身も過去に県のふれあい事業や語学留学、交換留学などを通して様々な国を訪れ、実際に私の目で見て多様な経験をしてきた。高校生までの間に海外に出ることができる生徒は多くはないだろう。その中で子どもたちは日本では使う機会が少ない外国語を学ばなければならないため、その動機付けは重要である。そのため、経験だけでなく、留学中に学んだ異文化コミュニケーション法などを伝えていくことで、実践に活かせるコミュニケーション法や文化の違いなどを知ってもらうことで、海外の人とのコミュニケーションや、外国で働くことなどを視野に入れてもらい、英語への勉強のモチベーションになるといいと考えている。

これらのことを実践することにより、教師主体の授業ではなく、生徒主体となり、授業への取り組み方もより良い方向へ向いて行くだろうと私は考える。受動的な授業を受けた生徒は社会に出た際にも受動的に行動する傾向が強いため、授業による変革の可能性は大きい。グローバル化の成長が進む中で、その社会に対応していける多くの人間はこれから社会に出て行く子どもたちであろう。そのため、教師としてしっかりとグローバル社会における日本の若者の実情と改善を念頭に置き、自立して世界に出ていける人材を育成して生きたいと考えている。